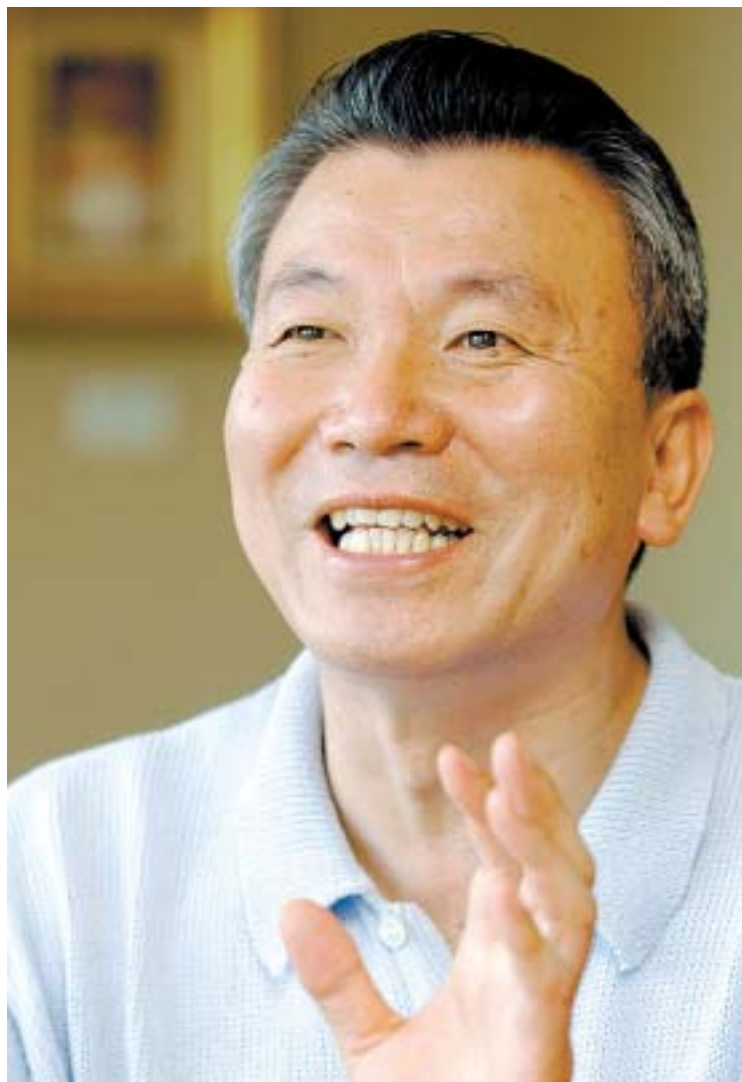


アルプス談話室

時の人を迎えて.7



安曇野で音楽を主軸にする

生きがいを感じながら「定年」のない人生を存分に送りたい。そんな夢を描いて安曇野に移り住んだ夫婦が、小さな音楽ホールをオープンさせてから丸三年が経過した。音楽を軸にした交流の輪は、地元だけでなく、全国各地に広がりにつつある。

観客と出演者が一体に

ホールの利用状況を教えてください。コンサート会場としての利用が中心で、年間約三十回のイベント(催し)に使われています。ピアノの独奏会から児童合唱会まで、さまざまな音楽表現の場になっている。演歌コンサートも二回あったし、中国の胡弓や沖縄の三線など地域色豊かな楽器の音色を楽しむ演奏会も開かれました。このホールは規模が小さい。だから、観客と出演者との距離が近く、双方が心の触れ合いを感じられます。音響の良さも自慢の一つで、音楽CDの録音場所にもなっている。ピアノやハーモニカの音楽教室としても使われているし、結婚式の会場に選んでくれたカップルもいました。

開館三周年記念のイベントは、シヨパン国際ピアノコンクールなどに入賞した

高橋多佳子のピアノリサイタルを四月に開きました。秋には、気迫あふれる舞台で知られ、ヨーロッパでも活躍している若林圭子の「シャソンの夕べ」が九月二十八日にある。十月二十六日には、にぎやかな仲間が集うジャズセッションを企画しています。

安曇野との「出会い」を教えてください。社会人になってから山登りを始め、北アルプスなどに通っていました。山岳写真が好きで、大きなカメラや三脚を担ぎながら登った。二十年ほど前の七月、土砂降りの常念岳から悔しい思いで穂高町に下山したら、ちょうど梅雨が明けました。青空の下でキラキラ輝く美しい風景が広がっていました。安曇野の地に魅せられた瞬間です。それから「安曇野通い」が始まりました。夫婦で年に五回ほど足を運び、地域の人たちと話をするようになった。いずれは安曇野に移住したいと思うようになり、土地探しにも着手しました。

あづみ野コンサートホール館長

はせがわ よしはる
長谷川 芳治さん 59

大阪市役所に長く勤めていたが、「一生懸命やったことが報われない」という思いから転身を決意した。安曇野への移住には、退職金や、奈良県の自宅売却代金などを充てた。妻の孝子さんと2人暮らし。最近ではベーゼンドルファーでピアノ演奏の練習を重ねている。

memo

あづみ野コンサートホール 穂高町の早春賦歌碑近くにある客席数100の小ホール。2000年6月にオープンした。音響設計の第一人者である永田穂氏が最新の音響技術を施したことで知られる。年中無休で、喫茶店も併設している。

ベーゼンドルファー

オーストリアのピアノメーカーで、1828年に創業した。熟練した職人たちが手間を惜しまずに高品質の製品づくりを続けている。奥深さと輝きのある音色が特徴で、世界中のピアニストから支持されている。

は譲れなかった。

名器と出会いホール建設

なぜ音楽ホールをつくったのですか。最初は喫茶店でも営みながら、のんびり暮らそうという計画でした。でも、喫茶店だけでは食べにくいそうになるので、集客のためにピアノを置くことにした。そして、知り合いの勧めで衝動買いしてしまったのが、名器・ベーゼンドルファーだったんです。

移住を決心した理由を聞かせてください。私は大阪市の職員でしたが、五十歳が近くなつて、定年退職後の人生を考えるようになった。好きな所に住んで、生きがいを感じながら過ごしてみたいと。安定した公務員の仕事は確かに魅力的でしたが、自分の性格に合わない点も多かった。六十歳の「定年」まで待っていると体力、気力ともに衰えてしまうと思ひ、五十五歳で退職しました。職場の仲間からは「もったいない」「失敗するぞ」などと引き止められたが、やりたいこと

夫婦ともにピアノに触ったこともなかったが、楽器店で鍵盤をたたいてみると、心に響く素晴らしい音色がした。目が飛び出るような値段でしたが、買うことに迷いはなかったですね。すると、ベーゼンドルファー購入の話が聞きた音楽関係者から「ちゃんとした建物に置かないと宝の持ち腐れになる」というアドバイスをいただいた。名器との出会いに運命的なものを感じていたこともあり、思い切つて質の高いホールを建設することにしました。結果的にそれが良かったようです。



名器・ベーゼンドルファーを使ったピアノ教室も開かれている

これからの目標は何ですか。多くの仲間が集い、音楽を通じて交流を深められる企画をどんどん打ち出していくことです。土地探しからホール建設、イベント開催まで、地域の人たちには大変お世話になっております。その恩返しにもなると思っています。

聞き手 新保裕介
撮影 山田 毅